

# 中心部震災メモリアル拠点に係るこれまでの経緯（概要）

平成23年3月11日 東日本大震災 発災

I 仙台市震災復興計画（平成23年11月）で「震災復興メモリアル事業」を位置づけ

II 仙台市震災復興メモリアル等検討委員会報告書（平成26年12月）⇒メモリアル事業開始

- 震災メモリアルに込める願い 東日本大震災の記憶と経験を 未来へ 世界へ つなぐ
- 震災メモリアルに取り組む意義
  - ・地域資源を引き継ぐ
  - ・記憶と経験を形にする
  - ・明日へ向かう力を育てる
 ⇒文化・芸術の力による創造、震災の記憶と経験を踏まえた総合的な学びが  
 これからの災害を乗り越え、震災の記憶と経験を未来へ、世界へとつなぐ力となる。

- 拠点整備による事業展開  
 2拠点（中心部・沿岸部）がそれぞれの特性を生かしながら事業を推進することが有効。



## これまでの主な取り組み



せんだい3.11メモリアル交流館  
《沿岸部の拠点》



震災遺構荒浜小学校・住宅基礎  
《津波の被害を知る遺構》



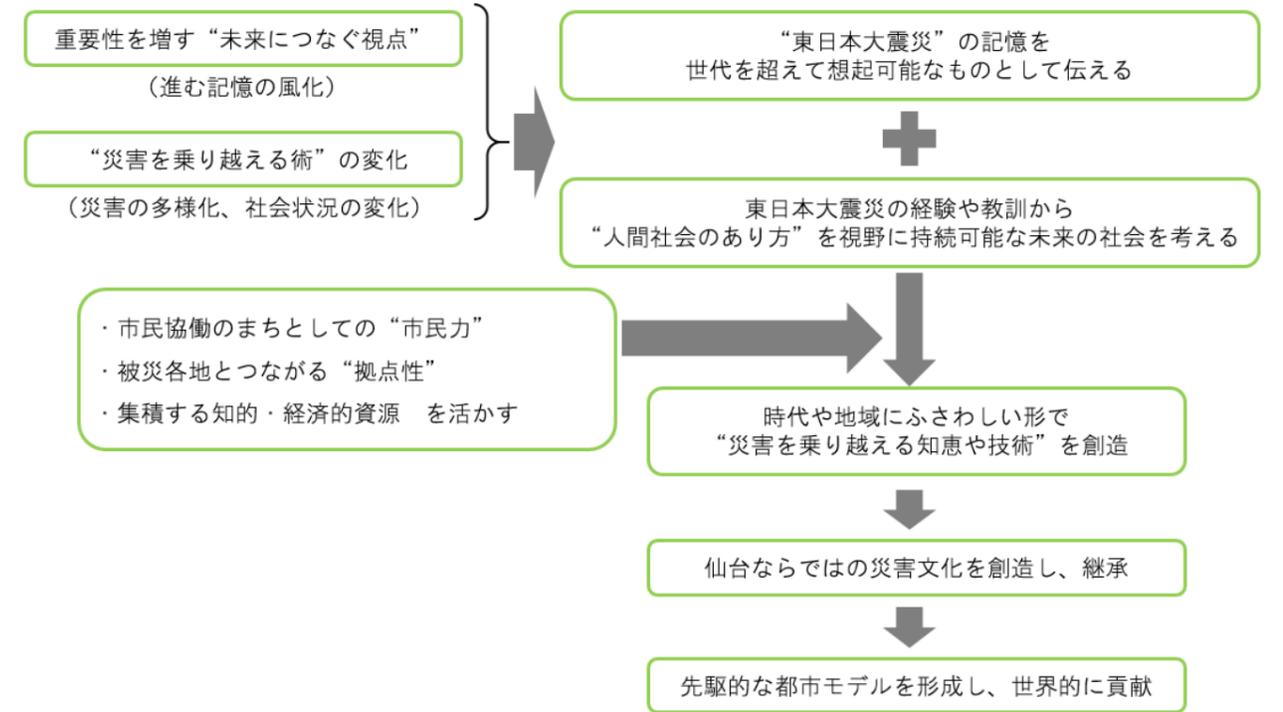
わすれん！（3がつ11にちを  
わすれないためにセンター）

III 仙台市中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書（令和2年10月）

中心部拠点のあり方や取り組み、その取り組みを展開するための仕組みなどについて検討するための場として設置され、委員会の議論の成果は報告書としてまとめられた。

## 中心部震災メモリアル拠点検討委員会報告書で示された施設像

- 本拠点の基本理念 ⇒ **災害とともに生きる文化（災害文化※）の創造**  
 ※災害は発生するものと認識し、災害が起きて、乗り越える術を持った社会文化



## ●本拠点の柱となる4つの取組み

- 地域や主体ごとに異なる経験の蓄積・発信・共有 ⇒ 世代を超えた記憶継承の機会づくり
- 新たな知恵の創造と社会への実装 ⇒ 広域的にひろがる被災地へのゲートウェイ

## ●本拠点の取組みを展開するための仕組み ⇒ 記憶と継承と創造の樹

大地にしっかりと「根」を張り、人々を包み込むように「枝」を広げ、年輪を重ねて「幹」を太くし、成長し続ける「樹」のように、記憶の拠り所として想像と創造を喚起する仕組みが必要。

- ① 災害の記憶を保ち、想像や創造の土台となる「記憶の根」
- ② 東日本大震災の記憶を日常に繋ぎ表し続ける「継承の幹」
- ③ 災害を乗り越える知恵の創造を喚起する「創造の枝」

## 本市の考え方

- ・東日本大震災の経験と教訓に加え、歴史上の地震や津波、気候変動に伴う自然災害等を対象とする。
- ・経験や教訓、学びや交流をもとに、災害を乗り越える術である「災害文化」を不断に創造し、市民生活への実装と、内外への発信を担う未来志向の拠点とする。
- ・展示や伝承活動のみならず、「災害文化」創造に資するソフト事業や専門的支援機能を備える。

## 【事業展開】

- ・本拠点完成までは時間を要し、その間も震災の風化が懸念されるため、今年度からソフト事業として「災害文化創造発信事業」「災害関連資料共有システム構築」を開始。